

天溪の企画手配旅行「小笠原島 5 泊 6 日の旅」

2020 年も終わりに近い 12 月 4 日～12 月 9 日「小笠原島 5 泊 6 日の旅」を行いました。

コロナの蔓延により海外トレッキングの天溪は冬眠・巣籠状態でしたが、有難い事に長年ご愛顧下さる一部の皆様より小笠原島ツアーの話をいただきました。

生き残るウィルスにはある意味理想的などと言われるコロナ菌の仕業で世の中は右往左往の大混乱。世界中に猛威を振るったスペイン風邪から丁度 1 世紀後のウィルス襲来は正に 100 年に 1 度の厄です。海外旅行は令和の鎖国令により密出入国は 2 週間の牢獄送り、晴れて出獄しても自粛警察に追いかけられる始末。こんな世相を反映したのか自粛疲れでのお願いでした。

この旅行は南国の島を楽しむ事は言うに及ばず優先事項はコロナ対策で、おがさわら丸は少し高い特 2 等船室、現地の食堂は個室利用、プライベートのアクティビティー、ホテルはツイン利用などを手配。3 密を避け、マスク着用、うがい・手洗い・アルコール消毒、そして大声で話す人達に近づかない、決して他国の大統領や首相を見習わない等々切にお願いした次第です。いずれにしても 65 歳以上の高齢者や基礎疾患のある人に対し旅行自粛の嵐が吹き荒れる中での船出でした。

※ビックリしたのは小笠原丸海運の PCR 検査。この時すでに乗船希望者全員に無料で検査を行ってくれました。

詳しくは「小笠原機運 PCR 検査」を検索ください。



(黄金色に輝く三宅島)



(おがさわら丸)

○小笠原島へ

目的地の小笠原は東京の南 1,000Km に浮かぶ世界遺産の島で、おがさわら丸(11,000 トン:1 年前にコロナ騒ぎが有ったクルーズ船の 10 分の 1)で 24 時間余り。船酔い、二日酔い、コロナに気を付けヨロソロー。

初日の東京・竹芝は快晴でデッキをそよぐ風は冬にして心地よく上々の滑り出し、6 時間後に御光を浴び黄金色に染まる三宅島を眺めながらこれからの晴天を祈念しました。翌日小笠原・父島に着岸後、最初のプログラムはシュノーケル。

二見港沖のポイントは近場にしてミドリイシ科のサンゴがびっしり並ぶ素晴らしいスポット。安全と保温のために厚手のウェットスーツを着てマシュマロマン風の姿で水中を楽しみました。

※通常海水温は陸上気温より 2 ヶ月遅れるとされます。この日の水温は差し詰め 10 月上旬並の 25 度ほどでした。



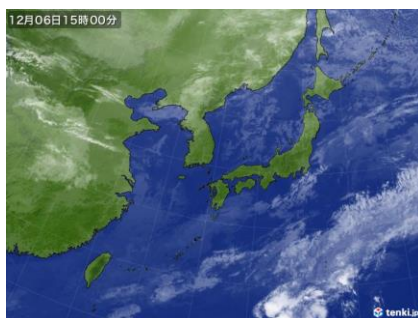
(東京湾)

○島内ハイキング

3 日目、4 日目のプログラムは小笠原の父島、母島ハイキングと島内巡り。この所、下の天気図の通り小笠原諸島近海に停滞前線が張り付いて毎日重めの天候が続いていました。案の定、この2日間も雨降り、特に12月7日は台風以外に珍しく大雨警報が母島中心に発令される始末。小笠原まで来て土砂災害に巻き込まれるのもバカバカしいので全てにおいて安全策を取りました。そこは山屋さん、雨の中でも結構知恵を使って色々楽しませていました。



(雨中のハイキング)



(12月6日の天気図)



○父島マリンレジャー

5 日目、東京に向け出発の日にして小笠原の最終日。今日のプログラムは島のクルーズとホエールウォッチング。海の女神が何故か微笑んで朝から天気は上々、大物遭遇に期待が高まりました。二見港を出港し、蛸岩にさしかかった所でイルカの群れを発見。船に戯れながらじゃれるようにドルフィンスイム、透明度の良い水中に小鯨体が踊りました。残るは最後の大物、ハイライトの鯨の出現。ホエールウォッチングは12月～4月がシーズンと言われ時期尚早と思われたその時、大雨警報のご褒美なのか目の前に忽然と鯨が出現しました。世界最大の哺乳類は矢張りデカイです。尾ヒレに描く白のマークは人間でいう指紋とかで固体の判別に使うそうです。



(イルカの群れ)



(南島上陸ポイント)



(見送りのアイランドクィーン)

○KAIZIN

筆者にとって小笠原は実に 30 年ぶりの訪問。今はヒマラヤ、キリマンジャロなど標高 6000m くらいまで案内していますが、かつてはバリバリのダイバーでした。その当時既にダイバーの神様的な存在にして日本にスキューバダイビングを普及させた先駆者の山田捷夫さん。かれこれ 40 年のお付き合いですが我々グループの為に持船アイランドクィーンを操船してくれました。その途中、ボードや手作り模型を使って鯨の生体説明まで。矢張りその道の神様はお客を引き付ける何かを持っています。尚、山田さんは梅池ベースの名スキーヤーでも有ります。(為念)

小笠原のマリンレジャーに興味のある皆様はコンタクトされては如何でしょうか、お勧めですよ！

山田さんのお店 ダイビングサービス KAIZIN <http://www.kaizin.com>



(鯨のしっぽ)



(くじらの説明をする山田船長)

以上